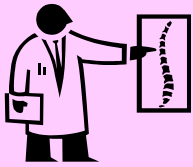


伊藤外科ニュース



78号

2010.11 発行

この原稿を書いている十月の中旬は、数日前より急に肌寒くなり風邪の患者さんも1日数人来院される時期となりました。体を動かす事が好きな私は、日曜日に仕事の都合で伊藤外科にいる時も、昼の温かい時間によく自転車に乗って四谷見附、新宿御苑、中央公園、代々木公園辺りに出かけます。この時期でも、新宿御苑の芝生はきれいでその色と周りのビルの風情がまた不思議な印象でした。中央公園の滝の前の池には、甲羅干しを楽しむ大きなミドリガメの団体さんが公園に遊びに来た人たちの人気のようなでした。これからは代々木公園の紅葉が楽しめる季節となり、新宿界隈の散策はまた楽しいものですね。



潰瘍治療の今昔

さて話は変わって、胃潰瘍、十二指腸潰瘍の話を少しします。私が医者になった昭和56年頃は、潰瘍患者さんが外科病棟にたくさん入院されていました。その多くは、潰瘍からの出血が止まらずショックになったり、潰瘍が深く胃や十二指腸の壁に穴が開き腹膜炎のため緊急手術を受けた方でした。59年に初めて遠方の病院に外科新兵として派遣された最初の当直では2日間で3名の胃切除手術に関わりました。

この様にとっても多くの患者さんが良性疾患である潰瘍症で開腹手術を受けていた時代が僅30年前にあったのです。

その後H2ブロッカー（内服薬や注射液）の登場で潰瘍手術は年々減少し、更に内視鏡（胃カメラ）による止血術の普及で今や潰瘍手術は激減しました。私が長く在籍した慈恵医大第2外科は、伝統的に潰瘍症の研究や胃切除後の後遺症に対する治療を多く行っていました。

入院患者さんは鼻から胃内に細い管を入れられ自分の胃液の量や胃酸の強さを計られていました。今の医療から考えると患者さんにかなり強い忍耐力を強いた時代でした。強い胃酸の存在が潰瘍の要因と考えられていたため酸を減らす治療、胃切除手術や胃酸を出すように命令する神経の切離術を行っていたわけです。

一方で、今の潰瘍治療の主役はピロリ菌です。長年潰瘍で苦しんでいる方や、ピロリ菌除菌のことで悩んでいる方は相談にお見えください。病状に応じて適切に対処したいと思いません。



最後に、いつも笑顔でお見えになる患者さんの立ち振る舞いから感じることを一寸。慌ただしい外来の時間の中で、その笑顔によって私たちスタッフがホッとさせていただいています。ありがとうございます。私も笑顔でいられる時間を多く持てるようになりたいと思っております。仕事中はアドレナリン分泌が特に多く強い口調となり皆さんにご迷惑をかけています。いよいよ寒い季節となります。皆さん、ご自愛ください。



三弓先生の本棚⑦

今回の一冊

藤沢周平 父の周辺

著者 遠藤展子

旅が好きで、国内あちこちへと足を伸ばしている。とくに東北地方は、なにかしら原風景を見る思いがして、ふらりと足を向けることが多い。なかでも幾度となく訪ねたのが、名峰に囲まれた山形県鶴岡市だ。

庄内藩主が居城した鶴岡城の跡地の公園に、今年4月、「藤沢周平記念館」がオープンした。藤沢周平はいわずとした、時代小説の作家である。鶴岡出身で、庄内を舞台にした小説を数多く残した氏が没してからすでに13年。待ちに待った記念館の開設だ。今年の冬はなんとか再び鶴岡へ、と思っていたところ、三弓の本棚に何冊かの藤沢周平の著作とともに、『藤沢周平 父の周辺』（文藝春秋刊）を見つけた。

著者の遠藤展子氏は、藤沢周平のひとり娘である。遠藤氏はのちに何冊か「父・藤沢周平」を綴った本を出しているが、本書は初めて父を描いた処女作だ。藤沢周平は20代前半まで庄内で過ごすが、肺結核の発病により東京の病院で療養することになる。その後、結婚し、展子氏が誕生。以後、田園風景がまだ残る練馬などの東京に暮らす。本書で綴られているのは、著者がまだ子供の頃、業界新聞の記者として働き、のちに作家になった父の「家庭人」としての姿である。

著者の実母、つまり藤沢氏の最初の妻は、著者を産んでまもなく亡くなっている。子供の世話のために、庄内から年老いた母を呼び寄せたものの、生活は不自由このうえない。親戚のすすめもあって、藤沢氏は娘が小学校入学前に再婚を決意する。著者の新しい「お母さん」である。本書の主人公は、「父・藤沢周平」であり、「お母さん」、つまり、作家・藤沢周平を支え続けた家人、このふたりの何気なくも愛おしい日常を、娘の目線から描いている。

作家の没後、家族がその人物を書き記した本は多い。私小説作家などは、本人が描いたものと、家族の目線から見たものの両方を読むことで、双方の微妙なズレも含めて、世界が膨らむおもしろさがある。

藤沢周平の場合、作品は時代小説で、しかも庄内に設定した架空の「海坂藩」を舞台とした作品の印象が強い。その作家の東京での暮らしというのは、必ずしも、著作の世界とは直結しない。それでも本書から、「作家・藤沢周平」の根幹となるものを見つけることができる。時代小説でも、権力者ではなく下級武士や庶民などを描くことが多かった藤沢氏。著者は最後のほうで、こう書いている「生涯『普通が一番』と言いつけた父。何気ない日常が宝物だった——」。

最後にひとつ、一弓から藤沢周平のお薦めの一冊。『春秋山伏記』（新潮文庫）。鶴岡の東、羽黒山を始めとする出羽三山は修験の山として知られている。この麓の小さな農村を舞台に、そこで暮らす人たちの日常に起こる事件を、ひとりの山伏が解決してく物語。話がおもしろいのはもちろん、描かれる庄内の風景もよし、土地の匂いが伝わるような方言の会話——「さぁ、山伏ど、こっちサどうぞ」——もよし！ 文庫の帯のキャッチコピーに書かれている通り、「痛快でユーモラス！ 人情派時代小説の傑作」です。（一弓）